

正宗白鳥

文壇縦横の記

文壇縦横の記

一

直木三十五氏の長篇小説「南国太平記」既刊の前篇と
中篇とを略々^ほ一日を費して通読した。単に小説愛好癖か
ら、この新作を手にしたのであつたら、二三章で未練な
く巻を投じていたにちがいない。しかし、はじめから批
評するつもりで取掛つたのだから、辛抱してしまひまで
読通した。私は少年時代から、古今東西のさまざまの小

説を、随分読続けて来たものだ。そして小説というものは、面白いものだ。と今なお思っている。自分でまずい小説を書いて来た経験があるため、今なお他人の傑れた作品には打たれることが多い。私自身の小説哲学のようなもの、私自身の小説趣味のようなものが、おのずから頑なに作上げられて、鑑賞の融通性を欠くようになっていくかも知れないが、とにかく、「南国太平記」のようなものに対しては、興味が湧いて来ないのである。才人の才筆と感ずるところはあっても、こういうものを愛読する世上の読者心理は理解されても、私自身の直接的な読後

感を云えば「興味索然」の常套語がピッタリ嵌はまっているのだ。

私は、この作者に関する好評、この「南国太平記」に関する好評は、屢々耳にしている。悪評は殆んど聞いたことがない。世俗の読者が愛好しているばかりでなくつて、文壇の具眼者も頻りに讚美しているらしい。近年不振を極めている小説界に、そういう非凡人が出現したのかと、私は不思議に思いながら、新聞できれぎれに読むのは煩いので、纏って出版されるのを待っていた。具眼者の好評も、いつも簡単な空漠たる讚辞だけで、立入っ

て聞糺ききただしたことはなかったが、幸い、「中央公論」八月号に、伊集院西齋氏の「直木三十五論」が掲げられているので、それによつて、略々具眼者の直木讚美の内容を推察することが出来た。だが、私は、この直木論に賛同し難いのである。

講談系統の歴史小説として、私は何等の新味をもこの長篇に見出すことが出来なかつた。作者はある種の「大衆文学」作者のように出鱈目を書き放しているのではあるまい。この上中二篇を貫いて重要な事件となつてゐる「呪詛」の術、「調伏」の方法についても、古実をよ

く調べているらしい。剣道についても正確なる知識を有
っているらしい。幕末の薩摩藩に關した史実をも心得て
いるらしい。人物の配置、全篇の構成も、楽々とやって
のけて、貧しい智慧の行詰ったと云うような醜態をあら
はしていない。私がこの長篇二冊を讀終ると、直ぐに手
にした十一谷義三郎氏の「唐人お吉」の、渋り勝ちの、
筆重たげな書振りとは、甚しく相違している。それで、
皮相だけで判断すると、後者は、「蛞蝓なめくじが匍くっている」
ようで、前者には、「天馬空を行く」勢いがあると云っ
ていいのだが、その実、私は後者の半分も前者から、小

説としての感興を受けなかつたのだ。首尾を通じて空々しく思われた。

呪詛や調伏は、前代人の愚昧なる迷信であるがために興味がないと云うのではない。作者がこういうものの威力を信じているらしくもなければ、こういう迷信の人間生活に及ぼす影響を皮肉に観察しているのでもなく、超自然の力が何かの寓意となり象徴となつて、我々の心を驚かすように取扱われているのでもないのを、私は飽足らず思っている。だから、これを読んで、昔の人間は、こんな愚劣なことを有難がつて行つていたのかと、徳川

期の浄瑠璃や戯作本によく散見している迷信と同様の感じを得るだけで、新たな芸術味は受入れられなかった。物識りの馬琴をはじめ徳川期の戯作者は支那伝来の奇談怪説をも、そのまま信頼していたため、それを自作に取り入れるにしても全体と不調和ではなかった。泉鏡花氏が三世相だの相性だの、いろいろな迷信じみたことや神秘的らしいことによつて小説を色取つているのも、そこに現代離れした作者独得の詩があり人世観があつて、氏の芸術世界が出現しているのである。「南国太平記」の呪詛や調伏は古めかしいことを一つの小説の趣向に取入れて

いるに過ぎないので、そこに何の新味もない。一篇の重大な要素になっっているこの迷信行為が、何等かの圧力をもつて、読者たる私の心の上に迫って来るのではないから、従つて、迷信行為をめぐつてさまざまな事件が続出し、さまざまな人間が生死の苦しみをしているのが、空々しく思われるのである。伊集院氏は、「我々インテリは、真実性をも失わないし、しかも十分に興味的であるような小説」を当面に要求していて、「この種のインテリ向きの作家の一人として、先ず直木三十五を持って来る」と云っているが、この評者などは、「南国太平記」にそ

んなに真実性を認めるのであるか。私自身はむしろ空々しくのみ思っていた。親が子を思う、師匠が愛弟子を思う、若い女が立派な男に心を惹かれる。家来が自己の主人のために尽すというようなところに真実性があるというのなら、それは型の如くの真実性で、小説にはそういう真実性が、旧い型通りに出ているに過ぎない。そんな昔の武士道小説の型を追っているのに過ぎないものに、今のインテリ読者は、「どえらい興味に身を任せたいと待ち構えていて、うずうずしている」のであるか。

玄白齋、牧某、調所、小太郎、益満、庄吉、その他の

男女を、一くせありげな色を持たせて、縦横に活躍させているが、彼等は屢々真剣勝負をやっているが、多くは型の如く動いている。それも古い型なのだ。一くせありそうところが却って在来有振れた型になっている。チヨン鬻時代の人物だから言語行動の古臭いのはあたり前であるが、皆んながこんな大ざっぱな頭脳を有って生きていたように観察して足れりとしている新時代の作家の量見が、私には分らないのである。私は、かつて、大佛次郎氏の「赤穂浪士」を通読したが、この歴史小説には、兎に角、講談趣味以外の新味があった。人間心理の

観察に旧套を脱したところがあった。西洋の歴史小説らしい面影もところどころあった。それに比べると、直木氏のは武士道型を墨守している。それも幸田露伴氏の歴史物のような根の据った武士道型ではなくって、少し茶番じみている。徹底しない古くささを感じた。今のインテリがこういう歴史物に心酔するのが事実だとすると、今のインテリは、思想の上皮や、生活の外形だけがモダンであつても、趣味や精神の根抵はまだ封建期の祖先の伝統からいくらかも脱していないことが推察される。評家伊集院氏の説によると、益満という人物は、全然仮構

な人物で、そして、「痛快男子」だそうであるが、この評語が当たっているにしても、これは、封建時代趣味に適した「痛快男子」であるのだ。私には、この男の豪傑振りが茶番じみていやみであった。剣劇風の超人的行為をして相手を傷けたあとで、お尻を振って、相手を揶揄するのが、いやみであった。

現代の或種の探偵小説や怪奇小説を読むと、頻りに恐ろしそうな事件を案出して読者を脅かしているものがあるが、旧弊な落語家の怪談ばなしみたいで、今時の人間を驚かす力は有っていないのである、無い智慧をしぼっ

てお化の真似をするのは馬鹿な話である。埃っぼい冬の朝にでも、薄ら寒い秋の宵にでも、襪ぼ襪ろを纏ったよぼよぼの老人を、何処かの街上で見たとすると、その姿を凝視するだけで、人間の免れない運命を感得することは有り得るのだ。そういう老人が五人七人と眼前に現われるのを見て戦慄を覚えるのは、妄想とは云えないのである。我々は自己の周囲に恐怖すべき現実をつねに知っている。事々しく仕組まれた恐怖小説によつては、却つて恐怖の実感の起らないことが多い。

「二十年でも三十年でも、毎日同じ事をして居なくては

ならぬ下級武士の運命」「父が意地のため、自分のために、牧を斬ってそれで仙波の名が高くなつたとてどうなるものか……」というような、懐疑の念が、おりおり青年小太郎の心に起るのは、「赤穂浪士」中の或人物が、復仇の価値を疑う心理と同様で、現代人の心に触れる訳であつて、封建の階級制度に対する下級武士の不平、その不平が倒幕運動の一つの刺戟になつたことに、作者は目をつけていないのではないが、そういう思想も氣まぐれに顔を出しているだけである。

幕末に於ける日本国民動揺史は思想的に見ても外形だ

けを見ても興味に富んでいるのだが、この時代を材料にした小説や演劇は、私が見た範囲に於ては大抵は不愉快なものである。維新前後の豪傑型といういやな型が出来ていて、作家はその型に嵌めて人間を書いている。「南国太平記」の人物だって常套的幕末人物の臭気が紛々としている。島崎藤村氏の「夜明け前」は、ところどころ読んだに過ぎないが、この小説はさすがに違っている。木曾の片田舎に寄せて来る時代の波を描いて、日本全体の変遷動揺を想像させる用意は整っている。維新の改革に重要な役目を演じた西南の雄藩を題材とした「南国太

平記」を読んで、却ってあの時代の真相が私の心に映つて来ないのだ。この作者の意図は、評家伊集院氏の謂うところの「薩摩藩のお家騒動を中心とした明治維新史」を描くのを主としたのではなくって、齊彬齊興などを上置きにした両派の反目軋轢あつれきを素材として、作者自身の豊富なる空想を描出しているのかも知れない。しかし、この空想は作者独得の色が乏しくって人物の性格、事件の構成が、在来の「幕末小説型」をいくらかも出ていないのだ。どういふ所にこの作者特有のところがあるのか、直木推讃者に訊いて見たいと思う。

文章は多少特色を有っている。会話がポキリポキリと途中で折れて、簡単に、手早く、受渡しされているのは面白い。

二

「唐人お吉」も、幕末の史実にあつた評判の小説である。私は、先頃八重子の扮したお吉芝居を帝劇で観たが、今、十一谷氏の作品を読むと、作の大意は、両者略同様であるに関わらず、芝居より小説の方が芸術的真實性に

富んでいて印象が深い。しかし、この小説は前篇がいいので、後篇は少し歯痒い感じがする。材料を持扱いかねているようである。「南国太平記」に比べると、規模の大小、波瀾の大小如何を別にして、時代相がそこに現われ、人生の一端がいきいきと現われている点で、私は、「唐人お吉」の方を取るのである。維新前後は、戯曲の題材としても、小説の題材としても、創作慾を唆るに足る事件に富んでいると思われるのに、今まで、ろくなものが出ていなかった。明治以来、文運隆盛だと云っても、それは凡庸な文人が輩出したという意味の隆盛であつた

のだ。歴史家の時代史や史伝よりも、傑れた小説家の歴史小説の方が、その時代の真相をよく現わしている筈なのだが、日本にはそういう小説は殆んどないと云っている。維新後六十余年を経ても、蘇峰氏の「近世日本国民史」の幕末篇に勝る歴史小説さえ一つもないのである。

塚原澁柿園の歴史小説は、日清戦争後、私がはじめて上京した時、幾人かの知友が頻りと賞讃していた旧式の英雄小説であったが、それでも硯友社一流の柔弱な今様の小説に飽足りない日本男子の心の糧となっていた。幸田露伴の「ひげ男」は、文章が雄健で色彩もあって、澁

柿園の芸術味の乏しい作品の比ではなかったが、旧式の英雄小説たることに於ては、澁柿園とさしたる隔たりはなかつた。森鷗外が新史劇新歴史小説を創始してから、新形式の史劇や歴史小説の模倣者が続出するようになったのだが、この系統のもので、そう力の籠つたものは現われなかつた。鷗外は明治文壇では、何と云つても群小作家をぬきん出た人物で、無造作に現代語で史劇を書き、日記や書翰だけに依つて、透徹した史伝的小説を書いたが、全精力を創作に傾け尽すような熱情家ではなかつたために、雄篇大作は残さなかつた。鷗外のような、史実

の考証に興味を持ち、人間心理を洞察する能力を有し、事相を適切に表現する文才を有った作家に、幕末の日本を背景とした一大歴史小説を書かせたかったと、私は思っている。鷗外の史劇はさしていいものではないが、思切って現代語を用いたのは卓見である。歌舞伎の古い台詞せりふのマンネリズムは、聞馴れているからさほどには思わないが、実はいやなものだ。直木氏のは左程いや味でなく、むしろスッキリしている方だが、他の二三の大衆作家の徳川時代用語は、歌舞伎の台詞以上に不快なものである。ああいう用語を喜ぶ読者は、その頭や耳の魯鈍

を示しているようなものだ。どうせ旧時代の用語が正確に分らないとすると、生半可な江戸言葉や武士言葉を用いないで、思切って現代語で書いたらいいだろうと思つている。その点から云つても。武者小路氏の歴史劇は、子供っぽいところはあつても、古くさい垢がついていないだけでも気持がいい。自然主義時代の無技巧説も尤もらしかったし、武者小路氏の文章無視の文章も面白いが、しかし、文学に志すほどの人は、思想や内容のみを偏重して、無技巧に安んじていられる筈はないので、各人好み好みの技巧に心を注ぐようになるものなのだ。谷崎、

里見、佐藤の諸氏の如きは、文章だけでも後進の容易に追随し難い特技を有っている。私は「唐人お吉」読後に、川端康成氏の「浅草紅団」と龍膽寺雄氏の「ア・パート」の女たちと僕と」とを速読して、新旧文学の相違を考えた。卷末の年譜を見て、これ等新作家の年齢を知って、私自身が今のこの三氏と同じ年齢の頃に、文学についてどういう考えを抱いていたかということ回顾了。硯友社風の文学に飽足らなかった当時の青年作家は、直接あるいは間接に、西洋近代文学の刺戟を受けて、徳川戯作家の態度文体から全然解脱した清新な作品を産出したつも

りでいた。写実主義自然主義あるいはロマンチズムの流派に属する、在来の日本の小説とはちがったものが続出したのであったが、しかし、どれも大成したとは云えないのである。「紅団」や「アパート」は、「新興芸術派」という漠然たる流派の傑作であるように云われ、その名を冠した文学集に収められているが、これをもっとハッキリさせるために、批評家の分類癖から区別したがる在来の流派のどれかに収めようとする、自然主義でもいいし、ロマンチズムでもいいと私には思われた。自然主義の骨法は現実暴露にあると極められたり、モウ

パッサンの小説のような淫蕩なことを書くと自然主義だと云われたりしたが、そういう定義から見ると、この二つの小説は自然主義の作品なのだ。作者の空想で夢のようなことを書くのがロマंचシズムの小説なら、この二つの小説もその派に属するのだ。小説というものは、いくら新奇を企てても、形の上からは、この二つのどっちかで、「新興」と云つても、衣裳の柄が少し異なるのに留まることが多い。あの頃の我々は、日本の社会が今より不安であった訳でもないのに、人間生活を悲観したがる傾向があつて、自然主義の作品にその感じが出ていたば

かりではなくって、小川未明氏や永井荷風氏など反自然派の作家のものにも、哀愁の調子くらいは流れていた。ところが、川端氏や龍膽寺氏などの作品には、私が見た範囲では、悲観的哀愁的の調子が乏しい。作中の男女も快活だ。一昔前の作中人物よりも小ざかしくってそして元気がよさそうだ。日本の西洋化も次第に進んで、西洋のように今日の生を楽しむ気風になったと思われないこともない。作者もそういう風に人間性を見るようになってきたのかと思われないこともない。それが「新興」と名づけられる所以であると断定すると、甚だ簡単だが、銀座

風俗や海水浴場の風俗のように、底の浅い新しさで、一時代を劃するほどの力があるとは思われない。「浅草」にしろ、「アパート」にしろ、昔の言葉ではお転婆と云われた女が、今様の着物を着、今様の言葉をつかって軽快に生きているのが、私などでも読んで面白くないこともない。しかし、こういう作者は面白づくで情景を叙しただけのためか、彼等の主観が我々に追ってこないの歯ごたえのしない感じがする。型の如きプロレタリア観に依った小説も、読み甲斐のしないものだが、雑報的「新興芸術派」小説も手頼りないものである。「浅草紅団」

は浅草を背景とした作者の空想で、「アパートの女達」よりも、描写にうまいところもあり、詩もあり、芸術上の出来栄えとして同列に置くべきものではないのだが、私は、ある人から、「新興派」の見本として指定されたから読んだのだ。龍膽寺氏の作品にはこの短篇以上のものであるに違いない。

三

先日ある知人が、八月号の雑誌小説について話してい

た時、「新潮」所載の徳永直という新進作家の短篇「苦しい道」の文章を褒めていたので、私は早速それを一読した。よくある型のプロレタリア文学で、主義に目醒めた闘士と、理解ののろい父親との関係、闘士と彼女との恋愛の心理など、極めて有振れた筋立てで、私はそこに何等の新味をも感じなかった。文章も単調凡庸で、しかもおりおり感傷的な口吻を弄しているのにうんざりした。が、私は、この短篇にうんざりした次手に、勇氣を起して、この作者の長篇「太陽のない街」を通読した。かつて築地小劇場で上演されて評判のよかった徳永直氏

原作のプロレタリア劇は、この長篇を脚色したものであったのだらう。私は一度観に行つたのだが、満員のために入れなかつた。その時からこの原作は読んで見たいと思つていたので。

これも、「苦しい道」同様の労働争議事件を取扱つたもので、例の如くバサバサしていて相当に読みづらいのだが、我慢して読みつづけると、案外面白かつた。近来頻繁に現われるこういう種類の小説の代表作としていいのではないかと思われた。旧い意味の芸術も、新しい意味の芸術も、全体のなかに「芸術」はあまり含まれてい

ないで、一つの争議経過の報告書であり、争議奮闘史である。「真理の春」の著者などは、在来の小説家系統の人であるから、筆に綾があつて、作品がバサバサしていないので、読者の頭を疲労させる度が少い。その代り、実際はどうだか知らないが、「真理の春」には、おまけがありそうに思われ、徳永氏のは、事実の克明な叙述のように思われる。文章も上手ではないし、部分々々の描写に、或光景や或人間の姿を浮上らせるような手腕は見られないが、太陽のない街のぐこみぐこみした一団の生活が、朧ろげにでも、我々の心に映る感じがするのは、作者の

態度の忠実と熱心との力であろう。「地獄と極楽の絵」と題する留置場の光景なんか、陰惨な空気が濃厚で、私の心は捉えられた。一人の孫を見殺しにした復仇に放火した老婆、年増の売春婦、檻樓ぼろツ屑の少年などが、物凄いい面を出しているのだが、作者の知識が足りないのか、洞察力が足りないのか、あまり簡単で、一朵の黒雲が通り過ぎたのに留っているのは遺憾である。しかし、それでも、有振れた平凡な留置場小説に比べると、多少印象的であると云っている。

ナポレオンの伝記が面白いと云っても、一般の読者に

取っては、彼れの策戦計画や実戦の詳しい記録は、あまり興味を惹かないものだが、「太陽のない街」にしても、争議その物に関する詳細な記録は、作者自身が力瘤を入れてゐる割合には、我々には感銘が薄い。軍人には、ナポレオンの戦術やその実戦の径路が参考になり、各方面の争議団組織者には、この印刷会社の労働争議の実録は、非常に参考になるであろうが、我々局外者には、そういう記事は、読みながら面倒くさい感じがする。

この長篇にも「苦しい道」と同様に恋愛事件が挿入されている。不断の「戦争」の間にも「恋愛」沙汰が、ナ

ポレオンの生涯を色取っていたように、醒めては天下の権を握っていた維新の英雄も、酔っては美人の膝を枕にしていたように、争議団の英雄も女を閑却されないらしく、争議を主題とした小説にも、大抵は男女関係を取入れている。陳腐と云えば陳腐だが、人間の本性には、古今東西、英雄凡人、ブルジョア、プロレタリアの差別がない訳だから、話が自からそこへ落ちて行くのである。しかし、この長篇のような小説では、恋愛の取扱い方がちがうと作者は信じているのかも知れない。作中のある女性は、「五人の家族を扶養するための淫売なら、あん

た方淑女様の神聖なる恋とかよりや、ウンといいわ」と公言している。「私達労働階級の婦人は、我々無産階級が完全に解放されるまでは、貞操はおろか、生命までも捧げなきやならないんだってね」と叫んでいる。この意見も珍らしいことではないので、親兄弟のために、あるいは主君の仇にむくいる費用をつくるために、婦人が身売りをすることは、封建時代の崇高な道徳になっていて、芝居や小説では陳腐な題材になっている。「南国太平記」にも、ある少女の貞操を犠牲にしてまで敵に近づかせて相手を倒そうと計画しているところがある。だが、そう

いう理窟や外形を離れて、作中の男女を見ちやいけないだろうかと思つた。

長谷川誠也氏の「文芸と心理分析」を読むと、思当るところが多い。フロイドの説に基づいた「白日夢と文芸」の如きも、一見奇矯の説のようだが、人心を見破っている感じがしないでもない。「詩とか、小説とか言うものは、非常に複雑な性質をもっているが、これを分析して見れば、白日夢の連続に外ならぬ」と云っているフロイドの説について、長谷川氏はむしろ反対して、フロイドの文学鑑賞力をさえ疑い、彼れの所謂「詩や小説は、名

誉権勢女性富貴などに関する作家等の願望を精巧に仮装させた空想に外ならぬ」という解釈は、「巖窟王や三銃士のようなロマンスには当嵌っても、古今の大作には当嵌らない」と云っている。長谷川氏の反対説にも一理あるが、フロイドの説も甚だ面白いのだ。「工場に職を得た孤児（あるいは貧民）の空想（白日夢）は、先ず一所懸命に働いて、工場主の信用を受けて、工場には無くてならぬ人となり、やがて工場主の家庭へ出入を許され、雇主の令嬢の婿となり、工場支配人となり、更に雇主の後継者となる」というようなことで、すわわち、幼少の

頃に作った空想（立派な邸宅、温かい家庭、富貴な生活など）の型に準じて将来の世界を描くと、フロイドは云っている。文学者はこういう人間の通有性を看破しているばかりでなく、作家自身も、意識的にか無意識的にか、そういう気持を有っているのだ。貧しい作家は、他日志を遂げて、原稿料や印税がどっさり入るようになったら、街上や劇場で目に触れて心に刻まれている美人を妻として、郊外に瀟洒しょうしやたる邸宅を新築し、高級な自動車を買おうなどと心の底で夢みていることが、その作品に自から現われるというような意味の観察を、フロイドは何処

かで下していた。私はそこには多くの真実が含まれてい
ると思う。通俗小説に於て正面からそういう気持が具体
化されているのを見るばかりでなく、「太陽のない街」
のような、遊戯分子の乏しい、真剣勝負の態度を持して
いるらしい小説にも、白日夢と思われる影が見えないこ
とはない。「それがある如く」「それがあつた如く」人
生の事実を直写するのには堪えられないので、ややもす
ると、人間を英雄化したがるのは、一つの白日夢の現わ
れである。鷗外の史伝風の小説は、多くの作者が書きた
がらず、読者は無論読みたがらず。「南国太平記」や「赤

穂浪士」風のものが栄えるのも自然の結果である。モウ
パッサンの小説の如きは、自然主義の標本で、「あるが
まま」の生粋の表現と云われていたが、本当はそうは云
えないので、三十歳以前から病菌に冒されていた、彼れの
頭脳に映った特種の世相の現われと云っていいのだ。「太
陽のない街」のうちの人物では、高枝と云う女が、最も
生きた女らしい面目を具えて活躍している。これだって、
長篇中の主要の人物としてはあまりに簡単な描写に留ま
っているのだが、憎悪羨望嫉妬のひらめきに、人類生存
の実相をあらわしている。そして、この女の白日夢の影

が自から映っているのが面白い。贅沢な洋服に纏われた、
栄養のいい、愛くるしい顔をした、態度の尊大な、社長
の孫娘に、毬を取ってくれと偶然命ぜられた時の心の動
揺が、簡単に書かれているが、これは、高枝が、女とし
て幼少の頃から白昼夢に描いたものを、この孫娘の上
まざまざと見たのである。そして、現世で自分の夢が満
たされないと知った上は、その夢を満たしていると思わ
れる相手を亡ぼしたいのも、人間の通有性で、古今東西
の傑れたる小説や戯曲のうちに、力づよく書かれている
が、女性にはその心理が強い。だから、最後に、孫娘が

不慮の毒殺の悲運に会うのだ。炯眼なる社長は、希臘悲劇の主人公のように、娘をあやして毒薬を与えたのは「あいつだ」と認めながら、腕を組んで瞑目して、苦痛を堪え忍び、「解剖したって生返るかッ」「死因が判ったってそれが何になる、馬鹿め」と、「猛虎は己れの傷口のために後退りはしない」意気を示した。高枝が門前で毬をついて遊んでいる孫娘を見て、×××××を与えたことが暗示されている。これは、ちよつと見ると、不自然なことで、美食に飽いている筈の社長の孫娘が、貧しい女の与える×××××入りの団子か何かを容易く口に入れそ

たやす

うには思われぬが、事實は兎に角、貧しき女性の白昼夢を具象化した小説の一片として見ると、人生の眞実が伺われるのである。

この長篇は争鬪報告書なのだが、私は作者の本意をそのままには受入れなかつた。むしろ作者の意図に反した読み方をして、ひとり合点の興味を感じたのである。

四

「大衆文学」 近来の傑作と云われる 「南国太平記」、 「新

興芸術派」の三秀才の作品、「プロレタリア文学」中の評判の一長篇を続けて読んだ私は、読後の印象を見詰めて、新時代の新しい文学の前に頭を垂れる気持にはなれなかつた。「唐人お吉」によつてあの時代の片影を知り、「太陽のない街」によつて自分のよく知らなかつた現代世相の一端を知つたのは、知識の上で有益であつたが、新芸術の出現をこれ等によつて認めることは出来なかつた。無論これ等の作家は、私の読んだ作品以外に幾多の傑作を出しているのかも知れない。

兎に角、今はまずいものを書いていても、若い作家に

は将末があるからいい。私はゴルキーの近作長篇「四十年」を日本語で読んで失望した。彼れ老いたりと思った。二葉亭の訳した「ふさぎ蟲」とか、「猶太人の浮世」とか、青年時代の彼れの小説は、反抗心にも富んだ生氣潑刺たるものがあつたが、「四十年」などには、ロシヤの現状に媚びて自己の老を守っている趣きがある。塩がその味を失っているのだ。大トルストイにしても、「復活」では焼きがまわっていて、運筆が老人らしくくどくて、全体に通俗のにおいが濃厚である。文学芸術に老熟は尊ぶべく、枯淡の味いには、我々東洋人の趣味から云って、

最も心を惹かれるのであるが、しかし、若い時代に奔放自在に自己を發揮した作家は、傍から見て、芸術に従事した甲斐があるように思われる。私は、レルモントフの「現代のヒーロー」を、中村白葉氏の訳で新たに読直して、自分が若かりし頃、小金井女史の古文調の「浴泉記」に感激したことを思出し、それとともに、この作者が、年少にして、この一卷を残して人生に早く暇を告げたことを考えた。ロシヤの国状がいかに変遷しても、この小説などは永久に新しいのである。日本は何事も移り変りの早い国であるが、若い血潮のみなぎっている「青春の

書」と云ったようなものは、かつてなかった。今度読んだ幾つかの小説についてもそう思われる。岩野泡鳴がよく「みんな主観の燃焼が足らぬ」と云っていたが、暗くも明るくも、享樂追求にしても、階級闘争にしても、それが芸術に現われたところでは、筆先の行届いているいないよりも、先ず、作者の主観の弱さを感じる。芸術家として白昼夢が浅いのである。これは、日本人の国民性かも知れない。

それで、私は、将来の日本の文学に多くの期待を懸けているのではないが、今のような混乱蕪雜のまままで終る

とは思われたい。徳永氏などの小説によつても察せられるように文章語が野卑になり、人物の会話も殺風景になり、作者自身もそういうことを得意としてゐるらしく思われるが、これは日本在来の文学に関する知識の乏しいためでもあるが、他の思想同様、西洋文壇の新潮流の飛沫を浴びてゐるためとも云えるのだ。「無遠慮になつた世相はどの国の文学にも現われている」と、長谷川氏は、詳しくその実例を挙げている。英国のような上品ぶつた保守的の国でもそうだ。「殆んどあらゆる方面に於ける社交上のタブーが除かれ、男女の行動は頗る自由無遠慮

露骨になると同時に、旧時代のものは悉く流行おくれと
なった。ハックスリーの小説中の一青年科学者が、羊肉
と神と、不滅の靈魂とヴィクトリア時代の小説家と、無
邪気な少女と、純潔、処女性などは、流行おくれだと云
っている。一ころの日本文壇で、現実暴露の模範的小説
とされていたゾラやモウパッサンなどの作品も、今日の
小説に現われているものに比較すると、なおヴェールを
冠っている。作中の何処かに宗教的、道徳的、あるいは
科学的芳香を吹送っているように感ぜられる。しかるに
現代の小説には、ヴェールを冠っている事物もなく、何

等香水の匂いもしない。また、若し何等かの芳香が有るとすると、それは裸の人間自体の匂いである。」

西洋がそうだとすると、西洋の真似をしたくてたまらない新代の日本作家が、この傾向を追わない訳はないのだ。野卑でも露骨でも無遠慮でも、在来の文学趣味を尊崇している人々に眉を顰めさせるほどのものが続出して、いるうちに、新芸術新文章が出現する訳で、必しも悲しむべきこととも思われない。しかし、昔ニーチェを学んで「牙齒も爪もない」ニーチェたるに留まり、モウパッサンを学んで、感傷的ないい気な小説が現われたように、

野卑も無遠慮も、太々しい所には達していないのである。龍膽寺氏、徳永氏、その他類を同じゅうする作家の作品にもまだ「裸の人間の匂い」にむせるほどのものはなさそうである。

一知半解の外国語の濫用、無茶苦茶な仮名使いや漢字の用い振りは、これでも文学であるか、芸術であるかと、識者を歎息させているが、これは必ずしも悲しむべきことでない。この混乱動揺のうちから「新代の日本文学」が出ないとは限らない。それも要するに傑れた個人力である。「ナツプ」というものも、現代で有意義の

働きをしているのであろうが、その勢いにひかれて、大勢が我れも我れもと入って行くのは、少くも文学の上からは面白くないのである。好んで一つの型に入るのは愚かなことである。

日本文学電子図書館

文壇縦横の記

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

底 本：「白鳥全集」第6巻、新潮社

昭和40年8月25日 発行

昭和51年8月30日 セット版

日本文学電子図書館